

劇 あそび (四才児)

幼稚園ごっこ

四歳児(林の組)教諭

村井トミ

取材方法

・劇あそびとして出来上っている脚本を、そのまま子供達に与えるのでない事は云う迄もない。今迄多く取扱われたものは、主として供達の好きなストーリーから取材した。そして皆で相談しながら年令に應じた子供達らしい一つの劇あそびを構成していった。

それで今年には子供達の日頃の自由あそびの中にあらわれるものを、そのまま劇の方へ持つていったらどうかと考えた。劇あそびとして完成されたものは、むしろたわいないかも知れないが、それでこそ子供達から生まれたものと思ひ今年の劇あそびのねらいを取材方法においた。

・組の半分は三歳より来た子供達、あとの半分はこの四月入園した子供達なのでまごっこ遊びはなかつたが、その中に「幼稚園ごっこ」を楽しんでやり出した。幼稚園ごっこ云々も時候柄か、遠足に行く事が大体で、先生になつた子供達が皆をならばせて庭の中を歩きまわる程度で、最初は面白がついていても途中でこわれてしまふ事が多かつた。

又部屋の中では人形芝居ごっこが行われていた。人形芝居ごっこ云々でも、まごこの家の後にかくれて窓からママ人形をのぞかせているのだが、その前には見物席が出来ていかにも面白そうだった。それで前の遠足と後の人形芝居の二つを取り上げて子供達の好きな遊びも加えて「仲よく

あそぼう」と「えんそく」の二つにまとめ、全体を「幼稚園ごっこ」とした。

指導経過

・入園後間もなくでもあり、子供によってはリズムに合わなかつたり自由表現が面白く出来なかつたりするが、皆が、のびのびと楽しんでする事を第一の目標とした。

・劇あそびにまとめる前に子供達の中で行われていた遊びが一層発展するように観察した。そして発展は必要な環境を整える事に努力した。その環境は或る場合は子供の喜ぶ物で現われ、或る時は一寸した先生の助言であつたりした。つまり先生も幼稚園の生徒になつて遠足に行き、ただ歩いてばかりいる時など「随分歩いてくたびれたから一休みしましょう」と云うと皆その辺に腰を下したりお弁当と食べる事になつたりする。お庭の坂になつている所を上る時には「高いお山ね、よいしょ、よいしょ」などと云うと皆本当に山のぼりの気になる。そして今迄より一層興味深くなつてく

る。人形芝居の方もママ人形では動きがな

いので子供の手に合せて(手の巾、首の太さ、お人形の軽さ——頭は綿のぬいぐるみ

——等を考えて)指人形をつくった。会話はあまり行われていなかったが先ずお人形を動かすだけでも面白いらしく大繁昌になった。舞台も子供達に合った小型の低いものをつくり、幕の操作など簡単にしてエナメルを塗って出来上った。ピアノを弾いてやったりすると尙楽しくなり「今、兎がダンスをするからピアノをひいて頂戴」などと要求するようになった。どちらも遊びに加わるグループが次第に大きくなっていった。

• それぞれ大分発展してきた時に、はじめて劇として扱う事にし、興味を深める為に動物の幼稚園にする事にした。そしてお面を早速与えた。お面は年少組なので先生が可愛く画いて与えた。

• はじめは動物達が幼稚園に来る所から、まわりつき、鬼ごっこ、汽車ごっこ、お人形さんごっこ等好きな事をして遊ぶことから始めて、誰もが兎になったり、犬になったりして自由表現で相当長い間遊んだ。

• その後、節の順を追って自分のなりたい役

の所は何度でも出たりして満足するだけ遊んだ。

• 筋を追って行く中にセリフが必然的に必要になってくるので子供達に考えさせて皆が考えた中から一番いいと思うものを相談して決めた。取材が自然なのでセリフは苦勞なく決っていた。

• 年令的にも一人で云う事は無理なので少くとも二・三人、多い時は皆で云うようにしたので恥しげに無邪気に云えた。

• はじめて好きな役一つを選んで配役を決め、自分の出ない時は静かに見たり、待ったりする事を指導した。待つ事は最初は出来なかつたが次第に出来るようになった。希望の多い役は或る期間遊んだ後、交替になる事にした。

• 先生はその場その場に適当な音楽を考えた。先生は選んだりして、一層楽しく表現出来るように心掛けた。

• 今度は前記の二つを「幼稚園ごっこ」として遊んだが、この他にも子供達の生活経験が豊富になるに従つて色々な場面が取り上げられると思う。

実例

〔仲よくあそぼ〕(十八人)

登場人物

ふくろう先生(二人)

兎(五人)

猫(二人)

犬(四人)

猿(五人)

• 舞台の段の上を保育室にして人形芝居の舞台と椅子をならべておく。一隅に、ままごとのゴザを敷いておく。

• 「靴が鳴る」の曲で兎が二・三人位ずつ手をつないで元気に舞台を一まわりして幼稚園につく。

(ふくろう先生が幼稚園の入口で皆の来るのを待っている)

兎「先生お早うございます」

ふくろう先生「お早うございます」(兎と同時に)

• 次に猫が兎の時と同様に手をつないで出て来て、舞台を一まわりし、幼稚園に来る。

皆「お早うございます」

(犬、猿も同様にして幼稚園に来る)

ふくろう先生「みんな好きな事をして遊び
ましょう」

(皆、ハリーと返事をし乍ら幕の陰に這入
って行く)

・「兎」の曲で兎がビヨンビオンはねながら
出て来る。しばらくとんだ後、「まりつき」
の曲で自由にまりをつく。

(「まりつき」の曲が小さくなるに従って
幕の中へつきながら這入って行く)

・猫がママ人形を抱いたりおぶったりしなが
ら、子守唄で出て来る。しばらくお守して
ゴザの上に来てお人形を下して、ねかしつ
ける。ねかした後で御馳走をつくり。「ま
まごと」の曲で御馳走をきざむ。

・犬が二人ずつ二台の汽車になって、「汽車
ごっこ」の曲で車をまわしながら出て来
る。後半はスキップ。ままごとの猫さんの
所へ所って

犬「乗せてあげましょう」

猫「どうもありがとう」

(猫、お人形を抱いて汽車に乗る——二人
の間に這入る——再び「汽車」の曲で歩
いたりスキップしたりして次第に幕の中

へ)

・お猿、「お山のお猿」の曲でとびはねなが
ら出て来る。

「鬼ごっこするものよっといで」

(誰かが言うと言つて皆その指にとまる)

「ジャンケンポンヨ」

(一人中へ這入り鬼になる)

「鬼さんこちら」の曲で手を叩いて鬼のま
わりをまわり最後に追いかけてこ。つかま

った子供が鬼になり、もう一度くり近す。

・ふくろう先生出て来る。

「お人形芝居をしますから皆いらっしや
い」

「ハリー」(皆方々から椅子に集る)

・ふくろう先生が舞台の中へ這入ってすぎな
指人形をはめて、

「これからお人形芝居をします」

(生徒達手をたたく。この時、子供のはめ

た指人形にふさわしい曲をひいてやる。
当日は兎やたぬきだったので「兎のダン

ス」「たぬきの曲」等)

ふくろう先生「今度は〇〇ちゃんして頂
戴」

(云われた子供が代つてする。幾組か代つ
た後)

ふくろう先生「ではこれでお帰ります。さ
ようなら」

(皆一緒にさようならをする)

生徒達は、「さよなら」の曲で手をふりふ
り帰って行く。先生は幼稚園で手をふつて
皆で帰って行くのを見送っている。——幕——

〔えんそく〕(二十人)

・登場人物

ふくろう先生(二人)

兎(二人)

猫(二人)

犬(二人)

猿(二人)

花(五人)

蝶(二人)

鳥(三人)

・「遠足」の曲でふくろう先生を先頭に二列
にならんで遠足に出かける。

ふくろう先生「お山に登るからころばない
ようにいらっしやいね」

動物達「ハリー」

(「山のぼり」の曲で山に登る)

動物達「ああ、お腹が空いた。お弁当にいたしましょう」

皆その辺に腰を下ろし、「お弁当」の曲でお弁当を食べたり水筒の水を飲んだりする。

そこへお花になった子供が一人ずつ曲に合せて出て来て曲の終わった所で花を咲かせる。

花が全部咲くと、花のゆらぐような曲で、ゆれたりまわったり自由に表現する。

蝶々が出て来てあたりをとび廻ったり花の蜜を吸ったりする。（「蝶々の曲」）

小鳥が出て来て飛んだりお話ししたりする。（「かわいい小鳥」の曲）

動物達「お花さん一緒に遊ばない？」
花「ええ、遊びましょう」

動物達「蝶々さん一緒にあそびない？」
蝶「ええ、遊びましょう」

動物達「小鳥さん一緒にあそびない？」
小鳥「ええ、遊びましょう」

皆で仲よく遊ぶ。二、三人ずつ組んで、「のぞきっこ」「お友達」の曲で遊ぶ。

動物達「もう遅くなったから帰るわ。さようなら」

花・蝶・小鳥「さようなら、さよなら」（動物達、手をふりふり帰っていく。「夕やけ」の曲）

花・蝶・小鳥「私達も帰りましたよ」（蛙が鳴くからかえろを歌い乍ら帰っていく。次第に遠くへ行った様に歌声小さく）

幕

泣き虫

—— わらべうた ——

泣き虫、毛虫
はさんで棄てろ。（東京）

★

泣きびしよ、こびしよ
酒屋の颯いたち
穴掘ってうめろ。（陸前）

訂正 十月号『協力遊びの発展と誘導』中、本文十六頁二行目、——動物を用いた機械的遊び——は、「機械的遊び」の誤りでした。訂正いたしますと共に、筆者並びに読者の方々に深くお詫び申し上げます。

36頁より続く 彼等に無理のない役割を与えれば、自信も出て来て明朗な積極性のある子供へと方向づける事も可能となります。又、子供達は同じ目的のために、製作に、歌に、踊りにと順次熱意を示す様になると協力が芽生えて成長していきます。その中に先生と子供達の間にも親近感が増して、何ともいえない和やかさが醸し出されます。

之を更に、おし進めて学芸会の運営を子供達にやらせる様に仕向けます。挨拶、接待等の役員も出す事によって独立心を育てる事も大切でしょうし、又、会の後では子供達に色々の反省と自己評価をさせ、今後のあり方についての話合も必要だと思えます。但しこの事は子供の精神発達に依じてやるべきで、入園の頃から求めるのは無理でしょう。入園当初から卒業迄、各段階に分けて夫々に適応した水準が設定されなければなりません。

学芸会が夫々の目標によって実施された後は、その目標に達成したか否かの全体評価と個人評価がなされなければなりません。この事によって、次の学芸会は如何にすべきかを自ずと知る事ができます。

（愛育研究所特別保育室）